# 令和６年度第１回佐伯市総合教育会議議事要旨

１　日　時　令和６年７月25日（木）14時30分～16時30分

２　場　所　佐伯市役所本庁舎６階　大会議室

３　出席者（会議の構成員）

佐伯市長　田中　利明　　教育長　宗岡　功
教育委員　平井　國政　　教育委員　山口　清一郎
教育委員　藤崎　郁　　教育委員　廣田　有加

（関　係　課）

【教育委員会】
教育部長　久々宮克也
学校教育課
課　　長　柳井　慎也　　総括主幹　吉田　康彦
主　　幹　矢田　倫一

（事　務　局）

総合政策部長　植田　実
【政策企画課】
課　　長　末永　健二　　総括主幹　久保田　博士
主　　任　大司　磨莉

４　要旨

| 次第１　市長あいさつ | |
|---|---|
| 市長 | （開始 14 時 30 分）<br>・佐伯市総合教育会議は、平成 27 年度から始まり、今回で１７回目。<br>・第２次佐伯市総合計画では、さいき７つの創生の柱の一つとして、「人が学び、人が活き、人が育つ教育の創生」を掲げている。<br>・また、さいきオーガニックシティの実現に当たっては、人材育成を最重点施策として位置付けている。<br>・そのうち、学校教育を充実させる基本方針として、市長部局と教育委員会との連携強化を図るため、総合教育会議の充実に取り組んでいる。<br>・本日の議題は「表現教育について」である。<br>・表現教育については、第２次佐伯市総合計画後期基本計画の「学校教育の充実」の施策として、「児童生徒が主体的に学び、『わかる・できる』喜びを感じる授業の取組」や「自己肯定感の向上と自己指導能力の育成に向けた取組」を掲げている。<br>・また、第２期佐伯市長期総合教育計画（後期）「さいき“まなび”プラン」では、基本目標Ｉ「生きる力」をはぐくむ学校教育の推進の基本施策として、「表現する場の機会の保障による自己肯定感の育成」を掲げ |

| | |
|---|---|
| | ている。<br>・そうしたことから、今年度、教育委員会において、平田オリザ先生を講師に10月と12月に表現教育を通じた人間力育成支援事業で講演会及びワークショップの実施を予定している。<br>・今後も、学校や教育委員会部局において、表現教育をより一層充実していく。<br>・本日の会議は、まず、教育委員会学校教育課から、市内小・中学校での表現教育の取組について説明をいただく。<br>・また、本日は、兵庫県立芸術文化観光専門職大学学長で、劇作家・演出家でもある平田オリザ先生にオンラインで出席いただいている。<br>・平田先生からは、「主体的、対話的で共感のある学び」についてご講演いただくことになっている。<br>・その後、各委員から忌憚のない御意見を伺いたい。 |
| 次第２議事 | |
| 柳井課長<br><br>平田オリザ氏 | ＜本市における「表現教育」の取組について説明＞<br><br>＜講演「主体的、対話的で共感のある学び」について講演＞ |
| 次第３意見交換 | |
| 山口委員 | ・以前読んだ本で、ある学長が新入生に、「昔の教授の権威は、足しげく現場に通うだとか知識の多さだったが、これからの情報社会の中ですべての情報はネットから取り入れられ、論文すらもChat-GPTなどのAIで書ける時代になった」と講話したとあった。<br>・このような時代に、教育者は、そういったことを生徒等に教えていくことになるが、教育者の長としてどういう方向性を考えていったらよいのか教えていただきたい。 |
| 平田オリザ氏 | ・教員が「教える」から「伴走型」になっていく、この意識改革ができるかどうかがポイントになる。<br>・教えることが好きな人が教員になっているが、学びの主体は子供たちであって、教員は子供たちの学びを支える側なんだということを自覚できるかどうかということ。<br>・学習観、学校観も転換する必要がある。<br>・それに先生方がついていけるかが大きな課題。 |
| 平井委員 | ・教育に関しては、子供たちが将来、社会に出て役立つ教育をしないといけないと基本的には考えている。<br>・子供の将来に関して、どうあるべきかなどあれば伺いたい。 |
| 平田オリザ氏 | ・将来とは、5年後なのか、10年後なのか、20年後なのかにもよるが、今の小学生が大学を卒業するのを15年後とすると、予測不可能な段階に徐々に入ってくると思う。<br>・例えば、今の12歳の小学生は、平均余命で考えてもあと75年ぐらい生き |

| | |
|---|---|
| | る。75 年後は 2099 年。あと 1 年長生きしたら、22 世紀まで生きる。<br>・そんな時代を私たちが予想することは不可能。将来こういう能力が必要だからこういう学力を身につけなさいということ自体がナンセンスになってしまう。<br>・予測不可能な時代にも生き抜ける力を子供たちに授ける以外に方法がないのではないか。<br>・例えば、それは合意形成能力であったり、最近よくいうレジリエンス、何か困難があってもそれに立ち向かい、どうにかそれを切り抜けたりする力というのは、時代がどう変わろうと、あるいは激しく変わる時にこそ必要な力。<br>・私は、そういう基礎力の方が重要ではないかと思っている。<br>・本学の学生たちは全国から強い意欲で本学に来ている。<br>・根室出身のある学生は、高校時代にオーストラリアの地方都市で 1 年暮らして、オーストラリアは商店街も元気、大人たちは 5 時で仕事が終わって、夜は演劇を楽しんだり、音楽を楽しんだり、バーベキューをやったりして、人生豊かに暮らしている、地元根室はなぜこんなに寂しくなったのだろうと自分で考え、色々調べて、観光とアートで根室をもう一度再活性化したいということで本学に来ている。そういう若者たちが増えている。<br>・私は、地域をどうにかしていきたいという意欲を持たせることの方がもっと重要だと思っている。<br>・東大や京大でノーベル賞を取るような子は、大人がどうにかして育てることはできない。<br>・それよりも、生き抜く力、しなやかさみたいなものを教育の中で身につけていく時代になってきていると思う。 |
| 宗岡教育長 | ・昨年豊岡市を訪問した時に、演劇的手法の取組を見て、私は、子供たちがまずその主体性、多様性、協調性を身につけさせるのが学校の役割じゃないかというところに強く惹かれ、共感した。<br>・特に佐伯市においては非常に子供たちが少なくなっていて、少人数の学級の中で、狭い空間、友達同士の中で育っていく。<br>・いわゆる主体性、多様性、協調性がなかなか身につく場になっていない。<br>・今年度から本市もこの演劇的手法の取組を始める。<br>・豊岡市において、演劇的手法に取り組む中で、教師の意識、あるいは子供たちの姿など、学校で身につけさせる部分のところがこのように変わってきたなど、具体に教えていただきたい。 |
| 平田オリザ氏 | ・豊岡市も最初の２、３年は抵抗感を示す先生方や保護者の方もいた。<br>・トップの進学校の豊岡高校も例外ではなく、数年前までは年内入試を利用する生徒は数名だった。<br>・ところが、３、４年前にいきなり 50 数名になり、そのうちの 20 数名が結構いい国公立大学に受かった。<br>・保護者は現実的なので「やっぱりコミュニケーション能力ですよね」となってきている。 |

| | |
|---|---|
| | ・この３、４年で一番変わったのは、実は生徒ではなくて教員の方ではないか。教員が明らかに伴走型になってきた。自分が教え込むのではなく、生徒を支える側になってきた。<br>・コミュニケーション教育をしているのは各学校 3 時間ずつ。それだけで変わるわけがないと思っている。<br>・特に中学の先生方は担任になると、総合的な学習の時間にコミュニケーション教育をしなければならない。<br>・そのことによって社会科の先生も音楽の先生も、自分の授業をアクティブラーニング化する一つのきっかけにしてもらおうということで意図して始めたが、そこは功を奏しているかと思う。<br>・佐伯市の事情はわからないが、豊岡市は但馬（たじま）地方という大きな地域の中にあり、教員異動がほとんどこの地域の中だけ。<br>・今、若い先生が多いので、育てれば育てるほど地域の教育が活性化する。いい先生が育ってきているなという実感はある。<br>・4 年ほど前だったか、教員と保護者全員にアンケートを取った。無記名のアンケートだったが、9 割以上はこのコミュニケーション教育をもっと増やしてほしいという意見だった。<br>・初めは、小 6 と中 1 プログラム対策で始めた。<br>・今は小 1、小２、来年度あたりから小３でも始める学校も出てくる。<br>・特に非認知スキルに特化した遊びのような授業を今増やしているところ。 |
| 宗岡教育長 | ・先ほどの教員の人事異動について、大分県の場合は広域で異動する。特に若い先生を中心に動く。<br>・大分県全体として、アクティブラーニングに取り組んでいるが、先ほど先生が言われた、大学の入試が変わっていて、幼少期からそういう部分が必要だという認識を高く持っているかと言われると、そこまではいっていない。<br>・大学の入試がこう変わっていくという情報が文科省、県を通じて高校にどこまで浸透しているかというと恥ずかしながら捉えられていない。<br>・そうすると、先生方の意識もやはりそこまで、こちらで指導して変えていくような取組にはまだなっていない。<br>・今後、大学の入試の変わり方というのは、全国的に当たり前のようになっていっているのか教えていただきたい。 |
| 平田オリザ氏 | ・これは捉え方次第だと思う。<br>・文科省が大学入試改革を最初に打ち上げたのは 2013 年。<br>・2015 年、2016 年に講演会やシンポジウムによく呼ばれ、その当時、進学校の進路指導の先生に、まず、変わるわけがないと言われていた。<br>・しかし、この 10 年で、半数は年内入試で入るようになっているように変わってしまっている。要するに、進路指導の概念が変わってきている。<br>・中学も高校も学校でできること、学校が得意なことをもっとたくさんやるように、まさに観の転換をしていかなければならない。<br>・現実にどうなるのか特に保護者の方によく聞かれるが、3 つのことを答え |

| | |
|---|---|
| | る。<br>・1つ目、わかりません。全部の大学がこれだけのきめ細かい人選をやっていくわけではないので、どのくらい変わっていくのか、誰にもわからない。<br>　今日の話は、私もわからない中で、全体の流れとしてはこうなりますよ、でもスピード感はわかりませんよという話。従来型の学力試験は、アメリカは2割だが、まだ日本は半分残っている。私はこの日本らしさで、比率として半分ぐらいでいいと思っている。<br>・２つ目、改革に取り組んでいる大学は比較的まともな大学。それもできないような大学はやめた方がいいということ。<br>・3つ目、これが1番大事だが、少なくとも今の小学生が大学受験するあと10年後、8年後には、皆さんの時代と違って、偏差値で入れそうな大学に入る時代ではもうなくなる。<br>　入試が多角化・多様化しているので、情報戦になっていく。この情報をちゃんと得られると、今までの偏差値では入れなかった大学に、ある特殊な能力を持っている子は入れる。逆にこれがないと、今までの偏差値一本槍ですると不利な入試になってしまう。この情報を、きちんと集めることが、新時代の進路指導の先生の役割になる。そこが変われるかどうか。 |
| 藤崎委員 | ・長い間、佐伯が嫌いなわけでもないのに、なぜ都会に憧れたり、損をしている人生だと思ったりした疑問が身体的文化資本という説明で腑に落ちた。<br>・今日お話しいただいた内容は、子供たちをどう育てるかや、入試のことだが、その先には、そういった人材が社会の中で求められ、幸せにつながっていくという出口につながると思う。<br>・私は、看護師の教育支援をする立場だが、看護の現場で求められている力というのは、知識は誰でも得られる時代になっているので、仲間と一緒にこの患者さんに何をしてあげたら、自分たちも幸せ、患者さんも幸せ、患者さんの幸せ度があがるのか日々工夫して実践する能力。<br>・それにつなげるために、先生がおっしゃったところの入試の変化がおこっているのだろうなと腑に落ちた。<br>・地域の中で、都会の中でどうやって生きていったら幸せになっていくのかということを考えた時に、社会が求める人材の変化、それを評価する仕組みの変化、教育する仕組みの変化は、必然だと思う。大きなヒントを得ることができた。 |
| 平田オリザ氏 | ・今は、兵庫県内など神戸大も含めて全部の看護学科に毎年授業に行っている。<br>・看護はシンパシーよりも、まさに共感力とかエンパシーの方が大事で、そこを身につけることは、非常に大事。<br>・これは今の若い子たちの責任ではない部分がある。<br>・例えば、今、一人っ子が多く、身近な人の死を一度も経験しないで医者や看護師になる学生はいくらでもいる。おじいちゃんおばあちゃんが亡くなって |

| | |
|---|---|
| | も一緒に暮らしてるかどうか、近くにいるかどうかで全然違う。<br>・私たち市民からすれば、身近な人の死を一度も経験せず医者や看護師になることは、すごく危ないと思う。<br>・しかし、教員の側が学生たちに、「身近な人の死を一度も経験していないのか。そんなことで医者になるのか。経験してこい。」とは言えない。<br>・だから、コミュニケーション能力をつけろというのは、子供たちに無理難題を押し付けている。地域社会を崩壊させてしまったのは私たち大人の側であって、子供の責任ではない。<br>・佐伯や私が暮らす豊岡は、まだ地域社会が辛うじて生きていて、斜めの関係や、いろんな大人との接触の機会があるので、これは地方の強み。<br>・また、ほとんどの子供たちが公立の中高に行く。公立の中高の強みは、多様性。様々な子に居場所を与えるというのは地方の強み。<br>・東京の私立の中高一貫校、下手すると小学校から同じような子たちが集められる。<br>・豊岡もそうだが、最大の強みはやはり自然。<br>・これだけ情報が細分化してきて、情報というのは全て誰かの手を通ったもの。<br>・自然という不確実性のもの、何が起こるかわからないものに子供の時から触れさせるということが、今、教育学の世界では見直されてきている。<br>・身体的文化資本だけを問うと都会の方が有利に見えるが、地方の方が有利な点もたくさんある。<br>・佐伯なりの教育プランを作っていただくというのが一番大事かなと思う。<br>・その時に、命の大切さといったものは地方の方が絶対に学びやすいので、そういうものを生かしていただくといいかなと思う。 |
| 市長 | ・現在の佐伯市は、人口 6 万 6000 人。来年は市町村が合併して 20 年になるが、約 2 万人減少している。<br>・これは時代の流れでもあるが、私は、これからは「量から質の時代」と考えている。<br>・人口が減っても、市民がこのまちで、シビックプライド、地域の誇りを持って生きていくことが大事だと思う。<br>・その意味で、知的好奇心を高めるため、市民大学を開校し、年に数回と月々の講座を開催している。<br>・講師には、経済界や大学の研究者など、各種分野の全国の一流の先生方をお呼びして学んでいる。<br>・先般、里山資本主義を提唱されている藻谷浩介先生をお呼びし、都会にばかり幸福があるのではなく、地方にこそ本物があるんだというメッセージをいただいた。<br>・この講座では、佐伯鶴城高校、佐伯豊南高校の生徒を含め 266 名の生徒が参加した。最後は、たくさんの生徒の皆さんから質問をいただくような市民大学講座を設けることができた。 |

| | |
|---|---|
| | ・これからは中学生も含めて、いろんな分野の先生方から話をお聞きしながら、学校で学べるもの以上のものをこの市民大学講座を通しながら学んでほしい。<br>・今、新しい地域コミュニティ組織を作っている。<br>・その地域の小中学生も参加して、大人たちと一緒に話しながら、自分たちの思いをまちづくりに提案してもらうなど、これも一つの表現教育にもなるのではないかと思う。<br>・この表現教育は、学校教育で中心にするが、社会全般にも通じる。<br>・来年の 10 月には、本市に日本語学校ができ、日本語を学ぶ 200 名程の外国人たちがこのまちに住む。<br>・そういう人たちとの交流を含めると、多文化共生、ダイバーシティとともに、まち全体が表現教育の姿を呈していく必要があると思う。<br>・そういう意味で、平田先生のキーワードである「好奇心」というものが、これからまちの元気さを引っ張っていくのではないかと考える。<br>・今年、平田先生に演劇的手法を取り入れたコミュニケーション教育の講演会と研修会をしていただく。今後ともご指導をお願いしたい。<br><br>16 時 30 分終了 |